

## 多言語社会ブータンにおける若者と英語

—— 英語借用語に関する意識調査から ——

佐藤 美奈子

京都大学大学院 人間・環境学研究科 共生人間学専攻

〒606-8501 京都市左京区吉田二本松町

**要旨** 本研究は、ブータンの国語であるゾンカ語による会話に大量に織り込まれる英語借用語と、その結果生じた独自の「言語モード」(Grosjean 2008: 39)に対する、若者たちの意識に着目する。ブータンにおいて教授言語として採用された英語の使用が、英語もゾンカ語も堪能な若い世代にとっていかなる意味をもつものとなりつつあるかを、「指標性 (indexicality)」(Ochs 1990) をキーワードに考察する。教師と学生を対象に英語借用語に対する意識調査をおこない、世代間の相違に着目した。調査からは、むしろ英語借用語を多用する若者世代に国語に対する規範意識がより強く示された一方で、ゾンカ語の翻訳語の開発が進み、ある程度語彙選択の余地が生まれるなか、若者たちからは、英語借用語の修辞効果やイメージ効果、仲間内での一体感や親しみ易さの創出等、コミュニケーション戦略として英語借用語を意図的に活用する傾向も示唆された。

共通語の普及を目標に言語の実用的側面に焦点があった時代の教育を受けた教師世代と異なり、現在の若者たちは、ゾンカ語を国家アイデンティティの核とする国民教育を強化した教育を受けている。言語の象徴的価値の強調は国語であるゾンカ語に対する規範意識を育んだ一方で、言語をアイデンティティと結びつける言語観は、幼い頃から英語を身近にして育つ若者たちに、英語を個人や世代のアイデンティティの基盤とする思考を派生させたと考えられる。英語の使用が一部の年代や社会層に限定される過渡期的な時代を背景に、英語借用語の使用は、若者たちにとって他世代との差異化を図り、仲間意識を高める、社会的アイデンティティを示す指標として機能しつつある。

## 1. はじめに

## 1.1 ブータンにおける言語的状况

ブータン王国 (以下、ブータン) では、1960年代初頭に近代的学校教育を本格的に導入した。ブータンは、19の言語をもつ多言語社会である (van Driem 1994: 87)。1961年に始まる第1次五ヵ年計画 (1961-1966) と学校教育4の本格的導入は、ブータンにおける複数の言語間の関係性を大きく変えた。以来、教授言語として採用されてきた英語は、現在、学校教育を受けた若者層を中心にブータンの国語であるゾンカ語に並ぶ「2つの公用語のひとつ」(Wangdi 2015: 13) と位置

付けられるまでになった。その一方で、「ゾンカ語はブータン人のアイデンティティの最も重要な要素である」(1993年国王憲章) と主唱する政府当局は、ゾンカ語を一元的に推進する姿勢を明示し、英語の隆盛に対して警戒を繰り返す<sup>1)</sup>。ゾンカ語に大量の英語借用語を織り込んだ「混成言語」(mixed language) (Matras & Bakker 2003: 1) は「ゾングリッシュ (Dzonglish)」と呼ばれ、「国語の崩壊を招く」<sup>2)</sup> として国営TVで番組化されたほか、「国語の劣化」(Namgyel 2003) を指摘する声もある。

現在、ブータンでは、官庁においては国語であるゾンカ語、学校教育では教授言語である英語、寺院では仏教の書記言語であるチョケ (Chöke)、

家庭では各民族の言葉を話すと言われる、社会的ドメインによる言語のすみ分けを謳う「4言語モデル (Quarilingual Model)」(Wangdi 2015: 11-12)<sup>3)</sup>が提唱されている。ただし、これらの4言語は、すべて横並びに対等にあるわけではなく、地理的な水平的分布に話者人口と社会機能的すみ分け、それに付随する有用性、威信性、象徴性による垂直方向の階層的分布が加わり「ダイグロシア (diglossia)」(Ferguson 1959: 325)ならぬ重層的な言語ヒエラルキー構造を形成する。さらに、教育機会の世代格差と地域格差という「二重の格差」(Zangmo 2004: 634-635)は、学校教育を通して普及が図られた共通語(ゾンカ語と英語)の能力と使用言語の相違を導き、現在のブータンの言語状況は一層複雑さを極めていく。

## 1.2 ブータンの若者たちと英語

ブータンの学校教育は、1年間の就学前教育を含む7年間の初等教育と、前期・中期・後期各2年ずつの6年間の中等教育を経て高等教育へと続く。英語教授言語体制は、ブータンの学校教育の顕著な特徴 (Farrell *et. al.* 2011; La Paire 2014) である。インドやフィリピン、韓国等、英語の早期導入が指摘されるアジアの国々でも多くは初等教育の高学年から徐々に時間数を増やす形で導入する。少なくとも初等教育では、生徒の第一言語や家庭言語、地域言語を補助言語とする場合がほとんどである。しかしながら、ブータンでは、学校教育において生徒の家庭言語はいかなる形であれ認められていない。英語は、ゾンカ語教育や価値教育等、一部の科目を除き、就学前教育から教授言語として導入され、就学前教育が始まる5歳 (PPD MoE 2020) から算数や理科、その他の主要科目を英語で学び、英語で情報を取り入れ、英語で思考する技術と姿勢を習得する。Cummins (2000) が BICS (Basic Interpersonal Communicative Skills (基本的対人伝達能力) と CALP (Cognitive Academic Language Proficiency (認知学習の言語能力) と分けて呼ぶように、学校教育で用いられる言語 (CALP) は、生活の言語 (BICS) とは異なる機能を担う。人の深い思考に関わり抽象的な思考をつかさどる言語となるのである

(Cummins 2000)。英語は、ブータン社会で高い威信性をもつだけでなく、英語による教育を受けた個々のブータン人にとって「学術能力を最大限に発揮し、知的好奇心を満たす」(泉 2013: 38) 主要な言語となっている。

さらにブータンでは、就学後多くの子どもたちが学校寮に入る。異なる民族出身の子どもたちが共同生活をするなかで、共通語は英語もしくはゾンカ語となる (佐藤 2019)。ブータンの子どもたちは、多様な第一言語をもつ一方で、彼らが成長期に家庭や出身地域言語に触れて育つ期間はかなり限定されている。子どもたちは、第一言語に準じる形で幼い頃から英語を身近にし、英語とゾンカ語の2言語に限定された学校教育体制のなかで育つのである。ブータンでTV放送とインターネットが解禁された翌年の2000年当時、読み書きができる人の平均言語使用は、話し言葉では英語とゾンカ語がともに40% 台前半と拮抗したものの、読みと書きでは英語が80%、ゾンカ語は20%弱であったという (Phuntsho 2000)。英語はブータンの「効果的なリングフランカ」(Phuntsho 2013: 60) であり、「(若者たちは) 英語能力を獲得することによって、共通のコミュニケーション手段を獲得し」(杉本 2016: 24) た、と指摘される。

## 1.3 本研究の目的と研究課題

本研究は、外国文化の流入による影響をめぐって揺れるマクロな動向を背景に、ミクロレベルにおけるブータンの人びとの外国文化に対する認識の解明をめざす、一連の調査研究 (Sato 2018, 佐藤 2021b) の一環である。全国の現役教師と学生を対象に調査をおこなってきた。これまでの調査では、生活のなかで複数の言語を自然習得してきた人びとが教育を通して外国語を学習するという経験を通して規範意識に目覚めていく過程を考察した (Sato 2018)。また、近代的科学技術の導入や外国人観光客・技術提供者との人的交流等、言語以外の外国の要素の流入に対する人びとの認識を分析した (佐藤 2021b)。これらの分析結果を踏まえ、言語に焦点を絞ってブータンの人びとの認識を考察したのが本研究である。

現在、ブータンでは学齢期の子どもたちの初等教育就学率は96.5%に達する(PPD MoE, 2020)一方で、成人(23歳以上)の半数以上を占める50.2%(NSB2017)は教育経験をもたない。英語を自在に使いこなせるレベルとして本研究が対象とした後期中等教育(高校)の就学率は75.7%、高等教育(大学)への進学率は23.6%(PPD MoE 2020)である。多言語社会ブータンに新たに加わった英語を、ゾンカ語をはじめとするそのほかの言語との関係性のなかでどのように位置づけているか、その使用は若者たちにとってどのような意味をもつものとなりつつあるか、過渡期の時代を背景に考察する。

本研究の目的は、ゾンカ語に大量の英語借用語を織り交ぜた独自の「言語モード」(Grosjean 2008: 39)を取り上げ、英語もゾンカ語も堪能な若い世代の、英語に対する認識を明らかにすることである。特に、現在の若者世代がゾンカ語を基盤とする会話のなかで意識的に、あるいは無意識に、英語借用語の「指標性(indexicality)」(Ochs 1990: 292)を利用している点を示す。「指標性」は、近年、言語人類学において注目を集めている概念であり(片岡・櫻井 2002; 山下, 他 2017)、言語の「明示的な意味内容」にとどまらず、「暗黙の文化的規範の実践を通じて我々が何を意味し成し遂げるのか」(片岡・櫻井 2002: 156)を視点として討議が重ねられている。指標性の具体的な例としては、敬意表現や終助詞、さらにコードスイッチングの使用など、社会的で「非指示的な(non-referential)」(片岡 2002: 22)意味機能とみなされる。現在のブータンでは、英語借用語や英語借用語を織り交ぜた発話モードに限られた層に属するという過渡期的状況にある。本研究が焦点とするのはまさに、社会の限られた層に属することを象徴的に示す言語モードを、社会や当人たちがどのように認識および評価しているかである。英語借用語が現在のブータンにおいて、若者世代のアイデンティティを指標する機能をもつことに着目し、英語が、その実用機能を超えてもちはじめている社会的意味を過渡期的な時代を背景に考察する。

## 2. 複言語話者の「ホリスティックな」言語観と「言語モード」

本節では、本研究に関するバイリンガル、混成言語、複言語主義についての見方を概要する。Grosjean (2008: 9)は、「ホリスティックな」バイリンガリズム観を提唱し、個人においては複数の言語体験が個別に存在するのではなく、それらが相互関係を築き補完し合いながら全体として存在すると述べている。バイリンガルは、異なる目的(purposes)、異なる生活領域(domains)、異なる人びとに対して2つまたはそれ以上の言語(もしくは方言)を使い分け、相補的に用いることにより、すべての生活のニーズをカバーする、という考えである。さらにGrosjean (2008)は、ある基盤となる言語を用いながらもそこに別の言語への切り替えや借用語、借用表現を織り込む独自の言語スタイルを「バイリンガルの言語モード(Bilingual's Language Mode)」として提唱した。

細川(2010: 175)は、複言語主義の立場からヨーロッパの多言語状況に言及し、「一人ひとりの中に、複数の言語が内在していることを認め合」う配慮と、「混成言語の存在を積極的に認めようとする姿勢」について述べた。「混成言語(mixed languages)」(Matras & Bakker 2003: 1)とは2つの異なる言語に由来する部分から成る言語である。たとえば、学校教授言語として英語を採用するアジアの多言語社会では、「不完全に習得した英語、またはほかの言語要素(たとえば、マレー語や華語の方言など)が混じって言語化された英語の変種」(郭 2006: 621-22)としてシンガポールの「シングリッシュ(Singlish)」や、タガログ語(Tagalog)と英語(English)の混成から生じたフィリピンの「タグリッシュ(Taglish)」(小野原 2004)の存在が報告されている。そして、ブータンにおいて「ゾングリッシュ」が「国語の崩壊」「劣化」と問題視されるように、シンガポールの言語政策においても「シングリッシュ」は「よい英語」(郭 2006: 22)の対極に位置づけられているという。これらの「新しい英語」(金井, 石井 2000)は、ひとつの言語使用を基準と

する規範から逸脱した言語使用であるとして「誤用」(八木 2006: 1) と見なされる傾向がある。しかしながら、「それらが「言語」として社会の中で実際に使用されている事実は、言語使用者にとってそうした言語が何らかの意味を持つことを示している」(小泉 2011: 32)。Myers-Scotton (1983) の有標モデルも「話し手の意図は必ずしも発話の指示的な意味によってではなく、話し手が選ぶ code によって明確になる」(安藤 2001: 112) ことを明らかにした。たとえそれが一般的に誤用とされようとも、その言語使用を多言語話者の意図的な選択として解釈することは、「言語を使用する個人のことばのとらえ方を重視する」(小泉 2011: 32) ものである。

### 3. ブータンにおける借用研究

本節では、ブータンにおける借用語の現状と先行研究を概観し、本研究の立場を示す。

#### 3.1 ブータンにおける借用語

本研究では、ゾンカ語における英語借用に焦点を当て、「語詞借用 (lexical borrowing)」に絞り考察する。ブータンにおける外国語の語詞借用は、「借用語 (loan words)」、 「混成語 (loan blend)<sup>4)</sup>」、 「借用翻訳 (loan translations)」の3つに分類される (Dorjee 2007)。ブータン政府は、国内に流入する新しいモノ、概念のすべてにゾンカ語の翻訳語を作成し、その使用を呼び掛ける方針を採っている (DDC 2002)。翻訳語の多くは、既存のゾンカ語を組み合わせた複合語 (compound words) やフレーズとして作成されるが<sup>5)</sup>、Dorjee (2007) が指摘するように、政府が翻訳語を作成した時点で、その英語の単語はすでに社会に浸透しており、新しい翻訳語が人びとに用いられて浸透し存続していくことは難しい状況になっている。そのため廃れていくのはたいてい翻訳語のほうとなる。また翻訳語は、従来の英語と比較して意味が狭く、限定的である一方で、比喩的に用いられる傾向がある (Dorjee 2007)。

#### 3.2 ブータン人による借用語研究

ブータン人研究者や教育者による、国内の英語借用語の実態や動向に関する報告は、ゾンカ語を推奨する政府の立場を支持し、英語借用語の使用がゾンカ語の劣化を促すとしてゾンカ語の翻訳語を推進する見解が多い。そのようななか、英語借用語を用いる若者の動機や態度に着目した研究として Dorjee (2007) と Namgyel (2003) を取り上げる。

Dorjee (2007) は、ゾンカ語の会話における借用語の実態を英語も含めヒンディ語やネパール語からの実例を挙げて説明し、借用をもたらず理由について分析した。Dorjee (2007) によると、生活の変化が新しい機器の流入をもたらし、それらに言及する必要性が言語を変えていくという。たとえば、従来牛引きによる耕運をしていた農家で耕運機 (power tiller) を導入した場合、「牛引き」やそれにかかわる農作業を示すゾンカ語 (khami, ngashi, thoop, ngadu, doori, 等) は用いられなくなり、やがて消えていくことになる。同様に、従来、計量単位として用いられた sang という単位は、現在、kg が代わりに用いられるようになり、それに伴い sang の計量に用いられた秤等を示す道具の名称も消えていった<sup>6)</sup>。Dorjee (2007: 124-125) は、これを純粹に技術的な発達が原因による借用の例として「必要を満たす動機 (need-filling motive)」と言及する。それに対し、外国文化に対する憧れや畏敬、外国文化に高い価値をおく心理から生じる借用を「威信にもとづく動機 (prestige motive)」と呼ぶ。

Namgyel (2003) は、高校生を対象とした借用語調査をおこない、借用に対する若者たちの態度と借用語使用の動機を明らかにした。Namgyel (2003) によると、若者たちは、英語をはじめとしてネパール語やヒンディ語等、他の言語の語彙をゾンカ語のなかで用いることは国語に損傷を与え、「国語の劣化 (deterioration to the national language)」をもたらすことになるとして借用語に対して否定的な姿勢を示したという。その一方で、学生からは「ゾンカ語、英語、ヒンディ語、そのいずれであれ混ぜないとスムーズに話せない」「ひとつの正しい言語を学ぶことは難しい」とい

うコメントも寄せられ、若者たちは、借用に対して否定的な見解をもちつつも実際には会話において多数の借用語を使用しており、混乱する状況が明らかになったという。Namgyel (2003) は、ヒンディ語やネパール語の借用に対する学生の見解および借用の使用と英語の借用に対する見解と使用には相違があることを指摘する。学生は、ヒンディ語やネパール語を「ビジネスとコミュニケーションの言語」とみなし、それを用いる以外他に選択肢がない場合に用いる言語と位置付けているという。英語にも同様の面があることは事実であるが、英語については、「威信」が借用動機のひとつとなっているという。Namgyel (2003) の調査では、対象となった高校生の多くが英語を「情報テクノロジーの言語、国際的なリングフランカ (international lingua franca)」とみなしていたという。Dorjee (2007) も、若者たちは英語を「教育、社会的ステータス、威信のある言語」とみなし、選択の余地がある場合でもあえて英語を選択し借用する傾向があると指摘した。

### 3.3 本研究の立場

本研究では、ブータン政府が推奨する「借用翻訳」と対比し、英語の形も意味も残した形でゾンカ語会話に取り込まれた形式として「英語借用語」(例、taxi)に着目し、その文体と使用をめぐる若者の認識を明らかにする。ブータンの場合、第2言語学習者が外国語を理解したり発話する際に自身の母語を使用する、足りない知識を補うための「補償戦略 (compensation strategy)」(Oxford 1990) 以外に、ブータン固有の言語に、近代化に伴い新しく流入した事物や事象を表す語彙が不足していることから「文化借用」(吉田, 2014: 155) と呼ばれる単語単位の切り替えも多く見られる。Dorjee (2007: 124-125) が「必要を満たす動機」と呼んだものである。ブータンにおいて、このような「消極的な目的」(横山 2002: 63) による借用の事例が依然少なくないことは事実である。しかしながら、本研究では、その事実を踏まえたとうえで、英語が現代の若者たちの思考とアイデンティティに深く根付いたものとしてあることを考慮し、翻訳語があるからといっ

て代替が利くものではない、英語借用語や借用表現が担う独自の機能に着目する。それにより、むしろ翻訳語が存在し、ゾンカ語か英語かを選択し得るときにおいてさえ英語を用いる若者の心理や、そうすることにより彼らが、言語の指示的な意味を超えて、英語借用語に見いだした、あるいは求める意味を明らかにする。

## 4. 調査の概要

2017年3月から4月にかけて学校教育機関に在籍する現役教師115人と学生407人(大学生250人、高校生157人)を対象に、英語による質問紙調査と半構造化インタビュー調査をおこなった。以下、調査の目的と着眼点、調査対象と方法、質問項目を示す。

### 4.1 調査の目的と着眼点

本研究は、英語もゾンカ語も可能な世代として学校教師と学生という2つの異なる世代を対象とする。ゾンカ語を基盤とする会話に織り込まれた英語借用語や借用表現等、英語の混用に対する両世代の意識と両者の相違を明らかにする。学生については大学生と高校生の2つの段階を設定した。専門性の高い教育を受ける大学生は、専門語彙に対処する機会が多いことから、高校生とは異なる意識をもつ可能性があると考えた。さらに大学生については専門性の違いから借用語に対する考え方が異なると考え、専門領域の相違も考慮した。以上により、第1に教師世代と学生世代、第2に学生世代では高校生と大学生、第3に大学生については専門性、という3つの観点に着目して分析をおこなう<sup>7)</sup>。

### 4.2 2つの世代

急速な近代化と学校教育の拡充が進められてきたブータンにおいて、世代の相違は大きな意味をもつ。特にブータンでは、世代により、教育の普及の程度だけでなく受けてきた教育の質も異なる。1960年代にブータンに初めて学校教育が本格的に導入されてから1980年代前半までは、英語を教授言語として採用し、ゾンカ語がブータンの国

語として制定されるなか、学校教育は、国民全員が共通して用いることができる共通語の普及を焦点のひとつとした。言語の実用機能に主眼があった時代である。その後、1980年代の国民統合政策、1987年から始まる一連の伝統文化復興政策では国家アイデンティティの維持と促進が国家目標として明示された。ゾンカ語は「ブータンの価値観、信仰、宗教を教えるのに有効で効果的な言語」(上田2006:161)との認識のもと、一部の科目の教授言語として採用され、「ブータン」という国家と「ブータン人であること」の象徴として教科書において繰り返し記載されている(ブータン王国教育省教育部2008)。

さらに両世代では、ゾンカ語の近代的言語としての開発の程度も大きく異なる。1960年代に学校教育の導入に際して英語を教授言語として採用したのは、ブータン固有の言語がいずれも文字をもたず、近代教育をおこなっていくために必要な語彙も大幅に不足していたからである。その後、1987年にゾンカ語開発委員会が設立され、ゾンカ語の文字の開発と標準化、翻訳語彙の造語による近代的語彙の拡充が飛躍的に進んだ。英語を使用しない限り必要な情報を伝えることができなかつた時代と異なり、徐々にではあるがゾンカ語が英語の選択の余地が生まれている。

本研究では、言語の実用的機能に教育の焦点があり、ゾンカ語の語彙の不足が大きかった時代に教育を受けた教師世代と、ゾンカ語の国家アイデンティティの象徴性が前面化され、十分とは言えないまでもゾンカ語の語彙が充足しつつある時代に教育を受けている現在の学生世代という2つの世代を対象とすることにより、両世代の時代的な教育・言語背景の相違が、英語の借用や借用語の使用による効果や弊害にもたらす認識の相違に着目する。それにより、時代の転換期にあるブータンの流動的な言語動態を明らかにする。

#### 4.3 調査対象と調査方法

調査対象は、教師は大学教師62人、高校教師45人、職業技術校教師5人、ノンフォーマル校教師3人の計115人である。学生は大学生250人、高校生157人計の407人である。教師の平均年齢

は42.4歳、学生の平均は19.7歳(大学生:平均20.3歳、高校生:平均18.7歳)。大学は全国のブータン王立大学から専門領域の異なる6大学(学部)、高校はレベル、公立/私立、地域性を考慮して、公立高校2校と私立高校1校の計3校を選出した。教師についてはそのほかに職業技術校、ノンフォーマル教育校に所属の先生方にも協力を依頼した<sup>8)</sup>。調査は、事前に各学校へ質問紙(英語)を郵送しておき、本論文の執筆者が順次学校を訪問した際に一斉に回答をおこなった。回答用紙は、その場で回収し、補足のインタビュー調査をおこなった。

#### 4.4 質問項目<sup>9)</sup>

2017年における調査では、英語借用語の使用に対する人びとの心的態度(質問1)と使用をめぐる評価(質問2)の問題に焦点をおき、次の2つの質問の結果を考察する。

- ・質問1—「自身/他人がゾンカ語の会話のなかで英語の単語を用いることについてどのように思いますか」—選択肢:a 良い, b 気にしない, c 仕方ない, d 悪い。
- ・質問2—「ゾンカ語の会話のなかで英語の単語を用いることの良い点(利点)/悪い点(問題点)について、自由に見解を述べてください」

### 5. 調査結果

#### 5.1 自身/他人の英語の借用に対する意識

図1は、質問1「自分および他人の英語借用語に対する意識」の結果である。

##### 5.1.1 自分の使用

質問1(1)「自分自身がゾンカ語の会話のなかで英語の単語を用いること」では、大学生と教師では「仕方がない」という回答が半数を超えた(大学生54.0%, 教師61.5%)のに対し、高校生では「仕方がない」という意見は、少なくともものの、大学生、教師と比較すると大きく低下した(32.4%)。近代的語彙が不足し、それが英語借用語使用の主要な要因のひとつとなっている(Dorjee 2007; Namgyel 2003)ブータンにおいて、「仕方がない」という意見は予想された。最も年

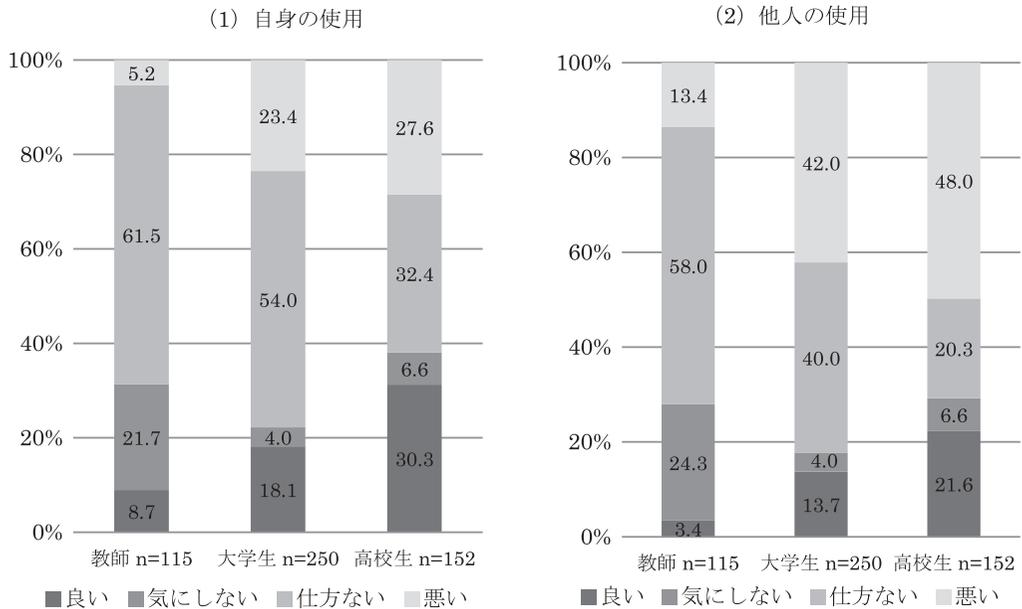


図1 質問1 英語借用語の自身の使用 (1)／他人の使用 (2) に対する意識

代の若い高校生において「仕方ない」という意見が低下したことには、ゾンカ語の標準化や文字の開発に加え、近代的な語彙が拡充した時代背景が反映している。大学生で「仕方ない」という意見が多かった理由として、調査時のインタビューから、「大学で専門的内容が多くなりゾンカ語の語彙がいかに不足しているかを改めて実感した」という意見が多数聞かれた。大学生になり専門性が強くなったことがゾンカ語の語彙不足に対する認識をより強めたと考えられる。

教師と学生（大学生、高校生）の相違は、「気にしない」という意見の割合である。教師は「気にしない」という意見が21.7%に及ぶのに対し、学生では大学生4.0%、高校生6.6%と著しく低い。さらに大学生と高校生の相違は、高校生は「良い」と「悪い」が拮抗して「良い」30.3%、「悪い」27.6%であったのに対し、大学生は「悪い」という意見が23.4%、「良い」が18.1%と、「悪い」が多い傾向がある。借用語の使用に対する意識と自覚が、教師と比較して学生のほうが強い傾向がうかがえる。

### 5.1.2 他人の使用

質問1 (2) 「他人がゾンカ語の会話のなかで借

用語を用いること」では、どの世代も「自分の使用」と比較して「他人の使用」では、「良い」が減少し、「悪い」が増大している。自分の使用に対しては「ある程度は仕方ない」と許容する一方で、他人の使用に対しては規範意識が強く働き、否定的な見解が増して評価が厳しくなっている。

大学生の場合、自分の使用について「良い」は18.1%、「悪い」は23.4%であったが、他人の使用に対しては「良い」は13.7%に減少、逆に「悪い」は42.0%と、「悪い」とする意見がほぼ3倍に増加した。高校生の場合、自分の使用同様に「気にしない」や「仕方ない」とするのではなく、「良い」／「悪い」がはっきりと分かれる傾向にあるが、自分の使用については「良い」と「悪い」が拮抗するのに対し、他人の使用については「良い」21.6%、「悪い」48.0%で、「悪い」とする意見が2倍以上となった。

同様の傾向は教師にもみられる。教師の場合、「自分の使用」についても「他人の使用」についても「良い」／「悪い」の両極の評価は低い傾向があるが、「自分の使用」については「良い」8.7%、「悪い」5.2%で、「良い」が若干上回っている。一方、「他人の使用」については「良い」が3.4%

と著しく低下したのに対し、「悪い」という評価は13.4%と、自分の使用の2倍以上、「良い」という評価の4倍近くに増大した。

## 5.2 英語借用語の使用に対する評価

質問2では、英語借用語を用いることの良い点(利点)、悪い点(問題点)について、それぞれ自由記述でコメントを求めた。522人のインフォーマントから、延べ1,299のコメントが寄せられた。図2は、コメントの内実を示したものである。

英語借用語使用の「良い点」については延べ465コメント(35.8%)、「悪い点」については延べ606コメント(46.7%)であった。そのほか、英語借用語使用の代替ツールとしてゾンカ語の翻訳語を用いることの問題点を指摘したコメントが228コメント(17.5%)寄せられた。翻訳語の問題点についての指摘は、間接的に英語借用語の利点についての見解として解釈できる(英語借用語の「良い点」と合わせると全コメントの53.3%)。なお、質問2の見解は、先の質問1における、英語借用語使用に対する肯定/否定の立場とは関係なく、良い点と悪い点の両方に意見を寄せる人も多くみられた。

自由記述のコメントは、KJ法(川喜田1970)に準じて意味のあるまとまりごとに断片化し、コーディングをおこなった。複数のコードについてさらにカテゴリー化をおこなった。その結果、5つのカテゴリー——「英語借用の実用機能」、「修辞上の影響」、「コミュニケーション上の影響」、「ゾンカ語、ブータン文化に対する損傷」、「言語を混ぜて使用することの問題」——に分類され

た。「英語借用の実用機能」については良い点のみ、「修辞上の影響」と「コミュニケーション上の影響」2つのカテゴリーでは「良い点」と「悪い点」の両方が挙げられた。「ゾンカ語、ブータン文化に対する損傷」と「言語を混ぜて使用することの問題」については「悪い」とする評価のみが挙げられた。

### 5.2.1 言語の実用機能としての必要性

「良い点」として挙げられた「言語の実用機能としての必要性」とは、Dorjee(2007)のいう、「必要を満たす動機」に相当するものである(4.1節を参照)<sup>10)</sup>。当意見は、「良い点」として寄せられた全465コメント中134コメント(28.8%)を占めた。具体的には、「英語の借用語を用いることでこれまでブータンになかった新しい概念や事物を表すことができる」、「近代的な概念や科学的な概念を表すことができる」、さらに「英語借用語を用いないと授業が成り立たない」「専門的话题を話せない」という意見も寄せられた。当カテゴリーは教師からの回答が多い傾向があり、134コメント中、教師からのコメントが80(59.7%)、大学生34(25.4%)、高校生20(14.9%)である。共通語の普及に焦点があり、近代的語彙や科学技術用語における不足が大きかったゾンカ語の代替ツールとして英語が主に位置づけられていた時代に教育を受けた教師世代にとって、英語とは実用機能として必要な存在、という認識が強いことがうかがえた。

### 5.2.2 修辞上の効果

「言語の実用機能としての必要性」で挙げられた利点は、英語借用語以外の選択がない場合につ

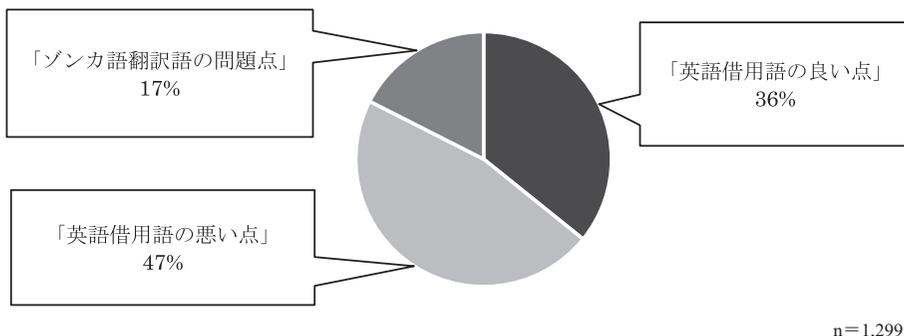


図2 英語借用語の使用に対する評価

いてのものであったのに対し、「修辞上の影響」として挙げられたコメントは、混成語、借用翻訳語を含め、ゾンカ語による語彙が存在し、英語かゾンカ語かの選択の余地がある場合に、あえて英語借用語を選択するという状況でのものである。

英語借用語の「修辞上の影響」として「良い点」に言及したコメントは、268 コメントであり、「良い点」についての全465 コメント中57.6%と過半数を占めた。当カテゴリーはさらに、(1)「表現の正確さ・意味の厳密さ」(82 コメント、「修辞上の影響」の「良い点」中30.6%)、(2)「利便性・簡潔さ」(56 コメント、同20.9%)、(3)「イメージ効果」(130 コメント、48.5%)の3つのサブカテゴリーに分類された。

(1)「表現の正確さ・意味の厳密さ」とは、「英語借用語を用いることで概念を正確に伝えられる」、「翻訳によるズレがない」といったコメントである。「良い点」に言及した全465 コメント中82 (17.6%)であった。当サブカテゴリーについてのコメントは大学生から多く、全82 コメント中62 コメント、75.6%が大学生からであった。これは、日頃、専門的な語彙の必要性から英語借用語を用いる機会が多いという状況によるものと考えられる。英語借用語の使用の「良い点」として挙げられた「表現の正確さ、意味の厳密さ」は、一方で、ゾンカ語の「悪い点」として、「ゾンカ語の借用翻訳語を用いたり、ゾンカ語で説明すると意味が正確に伝わらない」「誤解を招く」「ズレが生じる」等、が挙げられた。ゾンカ語の「悪い点」を挙げた全228 コメント中、150 コメント(65.8%)を占め、こちらも、大学生からが80 コメント(53.3%)を占めた。

(2)「利便性・簡潔さ」については、56 コメント(「良い点」についての全465 コメント中12.0%)が寄せられ、そのうち学生からが30 コメント(53.6%)と、過半数を占めた。「より簡潔に、明快地に表現できる」「長い説明がいらぬ・話が通じやすい」等、である。ブータンでは、基本的にすべての英語借用語に対してゾンカ語の語彙を造語する方針であるが、その方法は、「混成語」に拠ることが多い(Dorjee 2007)。そのため、同じトピックを表現するのに際し、ゾンカ語

のみで伝えようとする冗長な表現となりがちである。英語借用語を用いたほうが「より簡潔で、明快である」「長い説明がいらぬ」といったコメントは、このような借用翻訳語の造語をめぐる状況が背景にある。英語借用語の「良い点」として挙げられた「利便性・簡潔性」は、ゾンカ語の「悪い点」として、78 コメント(ゾンカ語の「悪い点」についての228 コメント中34.2%)が寄せられた。先の「表現の正確さ・厳密さ」同様、大学生からのコメントが多く、78 コメント中54 コメント、69.2%を占めた。大学生にとって、「より正確に、厳密に、明快地に意味を伝える」ことは、英語借用語使用の重要な利点として認識されている。

以上の2つのサブカテゴリー——「表現の正確さ・意味の厳密さ」と「利便性・簡潔さ」——が、修辞上の効果のなかでも実用的側面に言及したものであるのに対し、(3)「イメージ効果」は、より心情的な表現効果を意味する。「英語借用語を用いたほうが新鮮な感じがする」「おしゃれである」「知的な感じがする」「国際人らしい」といったものである。先の先行研究においても、高校生において英語が「教育、社会的ステータス、威信のある言語」(Dorjee 2007)、「国際的なリンガフランカ」(Namgyel 2003)として位置づけられ、「威信にもとづく動機」(Dorjee 2007)として指摘された。本研究においても当カテゴリーへのコメントは、英語借用語の「良い」点に言及した全回答465 コメント中130 コメント(28.0%)を占め、先の2つの「表現の正確さ、意味の厳密さ」「利便性・簡潔性」が大学生中心であったのに対し、当カテゴリーへの言及は、高校生が主体であった(当カテゴリー130人中78人、60.0%が高校生)。ただし、「修辞上の影響」の「悪い点」として言及されたコメントは、いずれも「イメージ」に関するものであった(英語借用語の「悪い点」についての全606 コメント中89 コメント、14.7%)。ゾンカ語の会話のなかに英語の単語が挟み込まれると「統一感がない」「乱雑な印象を与える」、さらに、「いい加減な印象を与える」といったものにまで及んだ。

「修辞上の影響」について、大学生が、英語と

ゾンカ語の両面から「表現の正確さ、意味の厳密さ」「利便性・簡潔性」に強い関心を示していたのに対し、「イメージ」上の悪化に言及したのは、89 コメント中、高校生 48 コメント (53.9%)、教師 41 コメント (46.1%) でほぼ半々であった。高校生は、人によって英語借用語の使用に良い表現効果を認める人と悪い表現効果を認める人で意見がわかれるだけでなく、同じ人物が「良い」と「悪い」の両方のコメントを寄せる場合もみられた。賛否両論を含め、英語借用語の使用による「イメージ」上の影響に意識が高いことがうかがえる。

### 5.2.3 コミュニケーション上の影響

「コミュニケーション上の影響」は、Dorjee (2007) や Namgyel (2003) の調査では挙げられていなかった、本調査での新しい見解である。英語借用語を用いることによりコミュニケーションの「場」に生じる効果を指す。全 1,299 コメント中 120 コメント (9.2%) と、割合的には低いものの、先の「修辞上の影響」同様、ゾンカ語か英語かを選択できる状況での英語借用語の選択について言及したものであり、ゾンカ語の語彙がある程度充足した近年において意識されるようになった、新たな見解として注目に値する。ゾンカ語の不足を補う代替ツールとして英語の実用上の機能に焦点があった時代とは異なり、英語がそれ自体、ブータン社会で独自の価値をもち始めたことを示唆する。それは、当カテゴリーへの言及が、学生 79 コメント (全 120 コメント中 65.8%)、教師 41 (34.2%) と、若い世代が多い傾向があることから示される。

当カテゴリーは、「良い点」と「悪い点」の両面への言及がある。「良い点」としては、たとえば、「場が和む」「互いに親しみがわく」といったものから、「仲間内で通じ易い」「一体感が生まれる」といったコメントである。これは、英語借用語の「良い」点に言及した全 465 コメント中 63 コメント (12.1%) を占めた。全員が学生であり、大学生からが 28 コメント (44.4%)、高校生からは 35 コメント (55.6%) と、高校生からの言及が多いことが特徴的である。

「コミュニケーション上の影響」に関する「悪

い点」として挙げられたのは、英語借用語を用いることにより「相手によって話が通じない」、「コミュニケーションの対象範囲が限定される」というものである。当カテゴリーの「悪い点」への言及は 57 コメントであり、英語借用語使用の「悪い点」に言及した全 606 コメント中 9.4% と、割合的には低い。ただし、同カテゴリーの「良い点」への言及 63 コメントがすべて学生からであったのに対し、「悪い点」への言及は、57 コメント中 41 コメント (71.9%) が教師からのものであり、世代による見解の相違が明確に示されたことは着目すべきである。興味深いのは、学生のなかでも特に高校性から「良い点」として言及された、「仲間内で通じ易い」「場の一体感」「仲間同士の連帯感」が生まれる、という点を、教師は、「(部外者の) 誤解を招く」「情報から排除される者が出る」、と否定的に評価している点である。

このように、同一の現象、影響を、教師は「悪い点」として認識し、学生、特に高校生は、むしろ「良い点」として認識しているという対照的な結果となった。ある言語が用いられることにより、コミュニケーションの対象がそれを知る限られた者に限定される現象、およびそのような効果を狙った言語の使用は、限られた仲間や事情をよく知った集団以外の者を排除する機能をもつ。ミクロな個々の文脈では Gumperz (1982) が *we-code* と言及し、マクロな社会的レベルにおける言語の機能としては Calvet (1999) が「群居機能」として言及した。英語の使用が社会の一部の層、特に若者を中心とした限られた層に限定される状況を、他者(他世代)排除と捉えるか、それとも「教育を受けた世代」としてのアイデンティティや仲間意識を生むとして肯定するかで評価が分かれた。

### 5.2.4 ゾンカ語・ブータン文化に対する損傷

以下の2つのカテゴリーは、いずれも「悪い」というコメントのみである。「ゾンカ語、ブータン文化に対する損傷」とは、ゾンカ語の会話のなかで英語の借用語を用いることが「国語の劣化」(Namgyel 2003) を意味し、ひいてはゾンカ語の「腐敗」(Dorjee 2007) を招く、という見解である。本調査の回答からは、「(英語借用語の使用は) ブータンの伝統文化の崩壊 (*corrupt*)」であり、

さらには「不敬の念 (disrespect) を示す」という意見も寄せられる等、言語を超えて文化、さらに精神性に対する見解へと及んだ。当見解には、ゾンカ語を国家アイデンティティの核に据え、その象徴性を強調するとともに、ブータンの伝統文化を伝えるのに最も有効な手段 (上田 2006) として国民教育の柱としてきた第 6 次五ヵ年計画以降の教育政策が反映されている。当カテゴリーへの言及は、英語借用語の「悪い点」に寄せられた全回答 606 コメント中 210 人 (34.7%) と 3 分の 1 程度を占め、特に若い世代に多い傾向があった (当カテゴリー 210 人中、高校生 87 人 41.4%、大学生 65 人 31.0% で合わせて学生が 71.4%、教師 58 人 27.6%)。

### 5.2.5 言語を混ぜて使用するという問題

英語借用語使用の「悪い点」に寄せられたコメントの最大の割合を占めたのが、「言語を混ぜる」ということそのものに対する否定的な見解である。英語借用語の「悪い点」に関する全 606 コメント中 250 コメント (41.3%) を占めた。異なる言語を混ぜることによる不統一感や乱雑さは「個々の言語の能力の低さを示す」といったコメントがみられた。英語借用語に限らず、ネパール語やヒンディ語等、ブータンの言語に従来から多く取り入れられてきた外国語全般を指しての意見である。当カテゴリーのコメントの特徴は、若者層が多くを占めたことにある。全 250 コメント中、高校生 102 コメント 40.8%、大学生 110 コメント 44.0% で合わせて学生は 222 コメント 84.8% である。教師は、38 コメント 15.2% であった。これらの帰属別コメントをそれぞれの帰属における割合でみたところ、高校生から当カテゴリーに寄せられた 102 コメントは高校生からの全 157 コメント中 65.0%、大学生は同じく全 250 人中 44.0%、教師は 115 人中 33.0% と、高校生では、全コメントの半数以上が当カテゴリーに集中したことが明らかになった。

質問 2 の英語借用語の使用についての評価は、先述のように質問 1 の英語借用語の使用に対する肯定/否定の立場とは関係なく、良い点/悪い点にコメントがあったが、質問 1 の結果で示された、高校生における規範意識の強さが、質問 2 の「混

ぜることに対する」否定的見解に反映されていると解釈できる。ただし、当カテゴリーの「混ぜること」に対する否定的見解は、「ブータン人」としてゾンカ語を用いるべきであるとする、政府のゾンカ語一元的推進の立場とは異なり、英語にせよゾンカ語にせよ、異なる言語を混ぜて用いることの弊害を指摘するものである。「言語を混ぜることなく、ひとつの会話をひとつの言語で統一させるべきである」という見解として寄せられたものである。

## 6. 考 察

以上の結果をもとに、本節では、先行研究と比較して本研究で新たに明らかになった点を確認し、それにより、ゾンカ語も英語も堪能なブータンの新しい世代である若者たちにとってゾンカ語を基盤とする会話で英語借用語を用いることがどのような意味をもつのかを明らかにする。さらに、ゾンカ語を国家アイデンティティの核として一元的に推奨する国家体制や、英語がゾンカ語と並ぶブータンの公用語として位置づけられながらも現実にはその使用が一部の社会層や世代に限られている過渡期的状況を背景に、若者たちにとって英語借用語がもつ社会的意味を「指標性」の観点から考察する。

### 6.1 「言語の規範性」についての意識と非実用的動機の高まり

Dorjee (2007) と Namgyel (2003) による先行研究と比較して、本研究の調査から新たに明らかになったことを、「言語の規範性」に対する見解と、非実用的動機に関する見解の 2 点に関連して挙げたい。第 1 に、「言語の規範性」について、先行研究からは、若者たちがゾンカ語のなかで英語をはじめとするネパール語やヒンディ語等、他の言語の語彙を用いることを「国語の劣化」(Namgyel 2003)、ゾンカ語の「腐敗」(Dorjee 2007) とみなし、借用語の使用に否定的な態度を示したことが報告された。本研究の調査においても若者たちが英語借用語の使用に対して同様の否定的見解を示し、当見解は、英語借用語の「悪い

点]について寄せられたコメントの3分の1を占めた。さらに本研究の結果からは、自身の英語借用語使用以上に他者の使用に対してより強く規範意識が働くことや、世代間の比較からは教師世代よりも若者世代で、さらに若者世代のなかでも大学生よりも高校生と、より若い世代で、そのような意識が強く示される傾向があることが明らかになった。また、当調査からは、国語に対する規範意識が言語から文化へと広がり、英語借用語は「ブータンの伝統文化の崩壊」を招き、それは「(ブータン文化への)不敬の念」を示す、といった精神性にまで及ぶ見解が示された。ゾンカ語をブータンの伝統文化の継承の柱とし、国家アイデンティティの核に据える政府の姿勢、およびそれに基づく国民教育の強化がより若い世代に強く浸透していることが示唆された。

その一方で、本研究の借用語調査における「借用の悪い点」に関する見解の最大の割合を占め、しかも世代間の相違が最も顕著に示されたのは、国語であるゾンカ語に限らず、異なる言語を混ぜることそのものに対する規範意識であった。当見解の84.8%が学生からのものであり、借用語使用の良い点・悪い点を含め、調査にコメントを寄せた高校生の65.0%と過半数が言語を混ぜて用いることそのものに対して否定的な見解を示した。幼い頃から英語を身近にして育った若者たちのなかには、国家アイデンティティの核としてのゾンカ語とは別に、英語を自身の個人的なアイデンティティの基盤とし(佐藤2019)、母語に準ずる位置づけに据えている者も出はじめている(佐藤2021c)。言語とアイデンティティを結びつけた政府の国民教育が、政府にとってはおそらく想定外の「派生」をしたことがうかがえる。同様に、「国語」に対する規範意識は、若者たちのなかで、ゾンカ語を超え、言語全般に対する意識へと発展したのではないだろうか。

第2に、英語借用語使用の非実用的動機について、先行研究では、「威信にもとづく動機」(Dorjee 2007)、「国際的リンガフランカ」(Namgyel 2003)としての位置づけが指摘されてきた。本研究の調査からは、修辭的效果として、「表現の正確さ・意味の厳密さ」といった、より

実用性に近いものから、「おしゃれ」、「知的」といった、より心理的な「イメージ」上の作用について若い世代から多くのコメントがあった。ブータンのこれまでの借用研究では言及されていなかった点で、本研究で新たに着目された点は、英語借用語の使用が生むコミュニケーション上の影響である。we-code (Gumperz 1982)、「群居機能」(Calvet 1999)として指摘されてきた作用で、割合的には、全コメント中1割に満たない(9.2%)ものの、当観点へのコメントは学生が過半数を占めた(65.8%)ということ、またコミュニケーションの対象を限定するという同一の現象を、若者世代は「仲間意識」「連帯感」を高めるとして肯定的に評価したのに対し、教師世代は「情報の排除」として否定的に評価し、対照的な結果となった。英語借用語が、現在の若者たちにとって世代アイデンティティの基盤としての指標性をもちつつあることが示唆された。

## 6.2 言語の指標性——国家アイデンティティと世代アイデンティティ

ゾンカ語の言語としての整備が進み、英語借用語を用いるか否かの選択に部分的ながらも個人の選択の余地が生まれたことは、若者世代を、英語借用語の使用によって生まれる修辭上の効果や指標性を意図した戦略的使用へと導いた。英語借用語の多用は、少なくとも現在のブータンにあって、コミュニケーションの対象を事情に通じた仲間内に限定する作用をもつ。限定された境界の内側に位置する者たちにとって、それは、仲間意識を高める効果を生む。さらにその対象から排除される者の存在も視野に含めて考えたなら、内側であるという自身の特権意識を高揚させる、二重の効果を生むことになる。

ある特定の言語や言語スタイルの使用を仲間意識や世代アイデンティティの指標として位置づける態度は、国語であるゾンカ語を国家アイデンティティの核として位置づけ、その使用を推奨した政府の国民教育の、ある種の「派生」である。政府の国民教育は、より若い世代に深く浸透している一方で、なかには、必ずしも政府の意図に収まらず、政府にとっては想定外の独自の展開を生

んでいる状況がうかがえた。

## 7. 結 論

現在の若者たちにとって英語借用語は、その指示的意味のみならず指標性をもつものとして位置づけられつつある。若者たちは、英語借用語使用の功罪に対して、より自覚的であり、その修辭的効果やコミュニケーション上の作用を意図的に、あるいは無意識に利用する傾向が示唆された。ゾンカ語の語彙の拡充が国家を挙げて急ピッチで進められ、ゾンカ語か英語かの選択可能な状況が大幅に広がったとはいえ、依然、「必要を満たす動機」(Dorjee 2007: 124-125)は、英語借用語の使用な主要な原因のひとつである。しかしながら、付加的要素として英語借用語がもつ修辭的効果やコミュニケーション上の作用が英語借用語の使用動機として、より重要な価値をもちつつある。現在のブータンの若者たちに示唆される、英語を個人の、あるいは世代のアイデンティティの基盤とする発想は、国家アイデンティティの核としてゾンカ語を据え、言語のもつ象徴的機能への自覚を促す教育へと焦点を移した国家の教育政策の転換が影響していると考えられる。言語とアイデンティティを結びつける思考は、国家アイデンティティから個人のアイデンティティへと広がり、ゾンカ語だけでなく英語へ、とりわけ若者独自のスタイルとして英語借用語をふんだんに交えたスタイルへと広がったのではないだろうか。

マクロな国家政策レベルでは、借用語は「文化的詐称と腐食」につながり過度の借用は「言語の死」をもたらすとして、「借用翻訳」がその「好ましい代替ツール」として推奨されている(Dorjee 2007: 133)が、はたしてそうであろうか。現在の若者たちが、英語かゾンカ語を選択し得る状況で英語を選択し借用する傾向があることは、先行研究からも明らかである(Dorjee 2007)。今後、ゾンカ語の借用翻訳が進み、言語の指示的な意味から選択可能な状況が広がるにつれて、英語借用語は、その独自の、非指示的な意味から、より意識的に意図的に、さらにはより積極的に選択されるようになる可能性も否定し得ない。英語借

用語の使用がそれを使用する者の教育程度や、さらには社会層を示す指標として働き、それゆえ若者たちのアイデンティティの基盤となるのは、依然、世代的、地域的、さらには階層的なムラがある、現在のブータンの過渡期的時代性を反映している。ブータン社会における英語の威信性が高まり、教育を受けた若者がその英語力を武器に外国をめざす傾向がより顕著となるなか(佐藤2021a)、英語を「国際的なリングフランカ」(Dorjee 2007)とみなす若者はますます多くなることが予想される。今後、教育が全世代に拡充されるようになるにつれて、英語およびその借用語がもつ、若者たちの世代アイデンティティとして指標性がどのように変化していくのか、継続的に現地調査を重ねて見守っていききたい。

付記 本研究は、国立民族学博物館特別利用研究員としての研究活動に基づくものであり、本稿の内容は2021年3月学位取得の京都大学博士(人間・環境学)学位論文の一部を大幅に改稿し、新しい情報と考察を加えたものである。

## 注

- 1) 1978年国王宣言で全国民のゾンカ語の習得を義務化して以来、1993年の国王憲章でブータン人のアイデンティティの主要な要素と位置づけ、2005年国会ではすべての公的会議のゾンカ語化を決議した、さらに2018年には首相自ら1993年の国王憲章を再確認し、2005年の決議の遵守、公務員のゾンカ語使用厳守を宣言した(Kuensel Online 2018. 2. 28). < <http://www.kuenselonline.com/govt-assures-support-to-promote-dzongkha/> > (2019. 6. 30).
- 2) *Dzonglish* – Is it making the National Language corrupt? < [www.bbs.bt/news/?p=1136](http://www.bbs.bt/news/?p=1136) > (BBS 2010. 9. 12 放送) (2020. 1. 20)
- 3) Wangdi (2015) は、当論文の執筆時点でゾンカ語開発委員会(Dzongkha Development Commission: DDC)の主任研究員である。「あくまで個人的見解」としたうえで当論文の見解を示した。
- 4) 「混成語」は、意味は借用するが、形は元の単語の一部のみを取り入れる形である(例、pagarasi, atali)。意味は英語から借用しているが、形はゾンカ語に合うように変形されている。
- 5) 例、「郵便ポスト(post-box)」の意味で「demdom」、「テレビ(television)」の意味で「jangthong」、「電話番号(telephone number)」の意味で「jithin-ang」等。

- 6) たとえば、「バター 1 キログラム」(a kilogram of butter) を言及するのに、「maar sang chi」ではなく「maar kg chi」と表現される。
- 7) 学校・クラス選定は政府や学校の指定であったため、男女比については調整し得ず、教師 115 人中男性 20 人 (17.4%)、女性 95 人 (82.6%) であるのに対し、学生は男性 326 人 (高校生 126 人、大学生 200 人) (80.1%)、女性 81 人 (高校生 31 人、大学生 50 人) (19.9%) と、いずれも大きな偏りがある。重要な視点であるにもかかわらずジェンダー差について本研究では、明らかにすることができなかった。今後の課題とする。
- 8) 大学は、ブータン王立大学から 6 大学。専門領域は、教育系 (パロ教育大学 PCE)、人文科学系 (言語文化学院 ILCS)、理工学系 (シェルブツェ大学)、生物・畜産系 (自然資源科大学 CNR)、看護系 (王立保健医学院 RIHS)、伝統医学 (国立伝統医学院 HITM) の 6 領域。高校は、公立高校 2 校 (ヤンチェンブー高校: 西部とジャカル高校: 中央部)、私立高校 (リンチェン高校: 西部) である。教師についてはそのほかに職業技術校 (チュメイ技術訓練専門学校)、ノンフォーマル教育校 (サンチョリン小学校、タクツェ小学校、ワンデユチョリン中学校)。
- 9) 2017 年の現地調査では、外国語の流入に関して、本研究で取り上げる 2 つの質問に加え、英語借用語の現状と今後についての見解として、次の 3 つの質問をおこなった。1) 英語借用語の使用の変化 (現状と今後) に対する認識、2) 英語借用語の増加に対する見解について今後、今以上に英語借用語が増えることに対してどう思うか、3) 英語借用語に対する今後の対応についての見解、2) については、佐藤 (2021b) で文化の流入に対する見解と比較して詳細に結果を分析している。そのほかの質問については、今後、順次、結果を報告していく予定である。
- 10) 「必要性」という表現は、次の「修辞上の効果」も「必要」としてとらえることも可能であり、曖昧なことから本研究では、「実用性」という表現を用いる。

#### 引用文献

- 安藤 祐介 (2001). 「Code-switching 研究最前線」『久留米大学外国語教育研究所紀要』, pp. 109-115.
- ブータン王国教育省教育部 (編) (2008). 『ブータンの歴史: ブータン小・中学校歴史教科書』(世界の教科書シリーズ; 18), 大久保ひとみ (訳). 明石書店.
- 郭俊海 (2006). 「教育システム——英語と華語教育を中心に」奥村みさ・郭俊海・江田優子ベギー (編) 『多民族社会の言語政治学——英語をモノにしたシンガポール人のゆらぐアイデンティティ』 pp. 9-32, ひつじ書房.
- 金井裕美子・古石篤子 (2000). 『新しい英語 シングリッシュその誕生と現在に至るまで』 慶応義塾大学湘南藤沢学会.
- 片岡邦好 (2002). 「指示的、非指示的意味と文化的実践——言語使用における「指標性」について」『社会言語科学』4 (2), pp. 21-41.
- 片岡邦好, 櫻井千佳子 (2002) 「第 9 回研究大会ワークショップ 言語と社会的関係 言語使用におけるイデオロギーと指標性の諸側面について」『社会言語科学』5 (1), pp. 156-159.
- 小泉聡子 (2011). 「複言語話者にとってのことばの意味——複言語主義的観点から——」『言語教育研究』2, pp. 31-41.
- 宮原温子 (2013). 「コードスイッチングのアコモデーション理論による一考察」『目白大学人文学研究』9, pp. 165-177.
- 諸橋邦彦 (2013). 「ブータン王国 2008 年国民議会議員選挙とその制度的特徴」『法政理論』45 (3), pp. 315-351.
- 小野原信善 (2004). 「アイデンティティ試論——フィリピンの言語意識調査から——」小野原信善・大原始子 (編) 『ことばとアイデンティティ——ことばの選択と使用を通して見る現代人の自分探し』 pp. 15-51, 三元社.
- 佐藤美奈子 (2019). 「ブータンにおいて学校寮制度が担う役割と民族言語文化の継承」『社会言語科学』22 (1), pp. 135-158.
- 佐藤美奈子 (2021a). 「「ブータンの多言語状況と言語の複層化: コロナ禍における若者たちの民族語による啓発ビデオの制作と配信」「ひと・ことばフォーラム」第 33 回 (2021 年度第 1 回). 2021 年 6 月 26 日, Zoom.
- 佐藤美奈子 (2021b). 「多言語社会ブータンにおける外国文化の流入に対する意識——英語借用語に対する意識との比較から——」『近畿大学教養・外国語センター紀要 (外国語編)』12 (1), pp. 41-61.
- 佐藤美奈子 (2021c). 「多言語社会ブータン王国における複言語話者の母語認識」*Studies in Language Sciences: Journal of the Japanese Society for Language Sciences*. 19, pp. 85-92.
- 杉本均 (2016). 「ブータン王国の若者の意識と教育——15 年の軌跡——」杉本均 (編), 『ブータン王国の教育変容—近代化と「幸福」のゆくえ』 pp. 9-49, 岩波書店.
- 上田晶子 (2006). 『ブータンにみる開発の概念——若者たちにとっての近代化と伝統文化——』, 明石書店.
- 八木真奈美 (2006). 「多言語使用と感情という視点からみる, ある「誤用」——定住外国人のエスノグラフィーから」『WEB 版リテラシリーズ』3 (2), pp. 1-9, くろしお出版.
- 横山吉樹 (2002). 「EFL におけるタスク学習とコード・スイッチング タスク学習の問題点の考察」『年報いわみざわ 初等教育・教師教育研究』23, pp. 61-69.
- 山下里香・Nishaant Choksi・吉岡乾・名和克郎 (2017). *Beyond Multilingualism: New Approaches to the Study of Contemporary Linguistic Diversity in*

- South Asian Societies, 『南アジア研究』 29, pp. 290-293.
- 吉田さち (2014). 「集団内のコードとしてのコードスイッチング発話——日本在住コリアンのニューカマーにおける言語シフトの実態把握に向けての予備的考察」『跡見学園女子大学文学部紀要』 49, pp. 149-165. 跡見学園女子大学
- Calvet, Louis-Jean (1999). *Language Wars and Linguistic Politics*, Translated by Michel Petheram, Oxford : Oxford University Press.
- Cummins, Jim (2000). *Language, Power and Pedagogy : Bilingual Children in the Crossfire*, Clevedon, UK : Multilingual Matters.
- Dorjee, Kinley (2007). Cultural Imperialism and Linguistic Change Impact of Cultural Imperialism on Dzongkha Borrowing. In Centre for Bhutan Studies (Ed.), *Media and Public Culture Proceedings of the Second International Seminar on Bhutan Studies*, pp. 121-136. Bhutan : Centre for Bhutan Studies,
- Dzongkha Development Commission (DDC) (2002). *Dzongkha-English Dictionary*, Bhutan : Rigsar.
- Ferguson, Charles A. (1959). Diglossia. *Word* 15, pp. 325-340. Online Journal homepage : < <http://www.tandfonline.com/loi/wrd20> > (Last accessed on : 13 February 2020).
- Grosjean, Francois (2008). *Studying Bilinguals*. Oxford : Oxford university Press.
- Gumperz, John J. (1982). *Discourse Strategies*. Cambridge : Cambridge University Press.
- La Prairie, Mark. (2014). *A Case Study of English-Medium Education in Bhutan*. Doctoral dissertation, Education Institute of Education University of London. < <https://discovery.ucl.ac.uk/id/eprint/10021621/>> (Last accessed on : 3 September 2021).
- Matras, Yaron and Peter Bakker (2003). The Study of Mixed Languages. In Matras, Yaron and Peter Bakker (Eds.). *The Mixed Language Debate : Theoretical and Empirical Advances*. pp. 1-19. Berlin : Walter de Gruyter.
- Myers-Scotton, Carol (1983). The Negotiations of Identities in Conversation : A Theory of Markedness and Code Choice. *Interactional Journal of the Sociology of Languages* 44, pp. 115-136.
- Namgyel, Singye (2003). *The Language Web of Bhutan*, Thimphu : KMT Publisher.
- National Statistics Bureau of Bhutan (NSB) (2018). *2017 Population and Housing Census of Bhutan National Report*. National Statistics Bureau Royal Government of Bhutan. < [http://www.nsb.gov.bt/publication/files/PHCB2017\\_national.pdf](http://www.nsb.gov.bt/publication/files/PHCB2017_national.pdf) > (Last accessed on : 4 August 2020).
- Ochs, Elinor (1990). Indexicality and Socialization. In Stigler, James W., Richard A. Shweder and Gilbert Herdt (Eds.), *Cultural Psychology*. pp. 289-308, Cambridge : Cambridge University Press.
- Oxford, Rebecca L. (1990). *Language Learning Strategies : What Every Teacher Should Know*. Rowley, Mass : Newbury House.
- Phuntsho, Karma (2000). On the Way of Learning in Bhutan, In *Journal of Bhutan Studies*, 2 (2) Winter, pp. 96-126.
- Phuntsho, Karma (2013). *The History of Bhutan*. Nodia : Random House India.
- Policy and Planning Division Ministry of Education (PPD MoE) (2020). *Annual Education Statistics 2020*. Thimphu : Royal Government of Bhutan.
- Wangdi, Pema. (2015). Language Policy and Planning in Bhutan. < [https://www.dzongkha.gov.bt/uploads/files/articles/A\\_Paper\\_on\\_Language\\_Policy\\_&\\_Planning\\_in\\_Bhutan\\_by\\_Pema\\_Wangdi\\_c8e8caeee831129a3be15aa6e99732c2.pdf](https://www.dzongkha.gov.bt/uploads/files/articles/A_Paper_on_Language_Policy_&_Planning_in_Bhutan_by_Pema_Wangdi_c8e8caeee831129a3be15aa6e99732c2.pdf) > <https://www.dzongkha.gov.bt/en/article/papers> > (Last accessed on : 1 January 2017).
- Zangmo, Tashi (2004). Literacy for All : One of Means to Achieve Gross National Happiness, In Centre for Bhutan Studies, *Gross National Happiness and Development*. pp. 634-635. Thimphu : Centre for Bhutan Studies.

## Young people and English in the multilingual society Bhutan —— From an awareness survey on English loanwords ——

Minako SATO

Graduate School of Human and Environmental Studies,  
Kyoto University, Kyoto 606-8501 Japan

**Summary** This study focuses on young people's awareness of the large amount of English borrowed words woven into Bhutan's national language, Dzongkha, and the resulting unique "language mode" (Grosjean 2008 : 39), using "indexicality" (Ochs 1990) as a keyword. The awareness survey of English loanwords this study conducted for teachers and students has clarified that although the younger generation had a stronger sense of norm for the national language, they tended to intentionally use English loanwords as a communication strategy, being aware of the rhetorical effect and image effect of English loanwords, and their function to create a sense of unity and familiarity among peers. The education that emphasizes the symbolic value of the national language, Dzongkha, encouraged young people to think about linking language to identity, which seemed to have led young people to think that English is the basis of individual and generational identities. In a transitional era in which the use of English is limited to some age groups and social groups, the use of English loanwords is functioning as an indicator of social identity for young people.